

秋期福音特別集会 (2) (京都)

本願压倒

――イザヤ書第31～33章――

1983年11月6日

小池辰雄

人は人にして神にあらず 今たちかえるべし 神剣 地水火風の如く メシヤ王国 因果応報
神をおそるは国の宝なり 本願の内容はキリストの十字架と聖霊 体知体感 本願压倒 包
みの霊 「ああ、そうかね」 釈迦にしかかなし 身より仇はなしと知れ 終末の王国

【イザヤ31】

1 助けをえんとてエジプトにくだり、馬によりたのむものは禍いなるかな。
戦車^{いくわぐのま} おおきが故にこれにたのみ、騎兵はなはだ強きがゆえに之にたのむ。
されどイスラエルの聖者をあおがず、エホバを求ることをせざるなり。2 然
はあれどもエホバもまた智慧あるべし。かならず禍害^{わざわい}をくだしてその言をひ
るがえしたまわず。起ちてあしきものの家をせめ、また不義を行う者の助け
をせめ給わん。3 かのエジプト人は人にして神にあらず、その馬は肉にして
霊にあらず、エホバその手^{みて}をのばしたまわば助くるものも躓き、たすけらる
る者もたおれてみなひとしく亡びん。

4 エホバ如此われにいいたもう。獅のほえ、壮獅^{わかし}の獲物^{えもの}をつかみてほえた
けるるとき、許多^{あまた}のひつじかい相呼びつどいてむかいゆくとも、その声によ
りて挫けず、その喧譁^{かまびす}しきによりて臆^{おく}せざるごとく、万軍のエホバくだりて
シオンの山およびその岡にて戦い給うべし。5 鳥の雛をまもるがごとく万軍
のエホバはエルサレムをまもりたまわん。これを護りてこれをすくい踰越^{すぎこ}
してこれを援^{たす}けたまわん。6 イスラエルの子輩^{こら}よ、なんじらさきには甚だしく
主にそむけり。今たちかえるべし。7 なんじらおのが手につくりて罪をおか
しし白銀のぐうぞう、黄金の偶像をその日おのおのなげすてん。8 爰にアツ
スリヤびとは剣^{つるぎ}にてたおれん。されど人のつるぎにあらず、剣かれらをほろ
ぼさん。されど世の人のつるぎにあらず。かれら剣のまえより逃げはしり、
その壮^{わか}きものは役丁^{よぼろ}とならん。9 かれらの磐^{いわ}はおそれによりて逝去^{すきさ}り、その
君たちは旗をみてくじけん。こはエホバの御言なり。エホバの火はシオンに
あり、エホバの炉はエルサレムにあり。

【イザヤ32】



1 茲にひとりの王あり。正義をもて統治め、その君たちは公平をもて宰さ
どらん。2 また人ありて風のさけどころ暴雨のがれどころとなり、早ける
地にある水のながれのごとく、倦みつかれたる地にある大いなる岩陰の如く
ならん。3 見るものの目はくらまず、聞くものの耳はかたづけきをうべし。
4 躁がしきものの心はさとりて知識をえ、吃者の舌はすみやくあざやかに
語るをうべし。5 愚かなる者はふたたび尊貴とよばることなく、狡猾なる
者はふたたび大人とよばることなかるべし。6 そは愚なるものは愚なるこ
とをかたり、その心に不義をかもし邪曲をおこない、エホバにむかいて妄な
ることをかたり、飢えたる者のところを空しくし、渴けるものの飲料をつき
はてしむ。7 狡猾なるものの用いる器はあしし。彼あしき企図をもうけ、
虚偽のことばをもて苦しむ者をそこない、乏しき者のかたること正理なるも
尚これを害えり。8 とうとき人はとうとき謀略をもうけ恒にとうとき事をお
こなう。9 安逸における婦等よおきてわが声をきけ。思い煩いなき女等よわが
言に耳を傾けよ。10 思い煩いなきおんなたちよ一年あまりの日をすぎて摺き
あわてん。そは葡萄の収穫むなく、果をおさむる期きたるまじければなり。
11 やすらかにおける婦等よふるいおそれよ。おもいわずらいなき者よおのき
あわてよ。衣をぬぎ裸体になりて腰に麕服をまといえ。12 かれら良田のため実
りゆたかなる葡萄の樹のために胸をうたん。13 棘と荊わが民の地にはえ、楽
しみの邑なるよろこびの家々にもはえん。14 そは殿はすてられ、にぎわいた
る邑はあれすたれ、オペルと櫓とはとこしえに洞穴となり、野の驢馬のたの
しむところ羊のむれの草はむところとなるべし。15 されど遂には霊うえより
我儕にそそぎて、荒野はよき田となり、良田は林のごとく見ゆるとききたらん。
16 そのとき公平はあれのにすみ、正義はよき田におらん。17 かくて正義のい
さおは平和、せいぎのむすぶ果はとこしえの平隠とやすきなり。18 わが民は
へいわの家におり、思いわずらいなき住所におり、安らかなる休息所におらん。
19 されどまず雹ふりて林くだけ邑もことごとくたおるべし。20 なんじらもろも
ろの水のほとりに種をおろし、牛および驢馬の足をはなちおく者はさいわい
なり。

【イザヤ33】

1 禍いなるかな、なんじ害われざるに人をそこない、欺かれざるに人をあ
ざむけり。なんじが害うこと終らば汝そこなわれ、なんじが欺くことはてなば、
汝あざむかるべし。2 エホバよわれらを恵み給え、われらなんじを俟ち望めり。
なんじ朝ごとにわれらの臂となり、また患難のときにわれらの救いとなりた
まえ。3 なりとどろく声によりてもろもろの民にげはしり、なんじの起ちた



もうによりてもろもろの国はちりうせぬ。⁴ おおねむしのものをはみつくすがごとく、人なんじらの財をとり尽さん。また蝗の**とびつどう**がごとく、人なんじらの財にとびつどうべし。⁵ エホバは**最**たかし**高**処にすみたもうなり。エホバはシオンに公正と正義とを充せたまいたり。⁶ なんじの代はかたくたち、救いと智恵と知識とはゆたかにあらん。エホバをおそるるは国の宝なり。⁷ 視よかれらの勇士は外にありてさけび、和をもとむる使者はいたく哭く。⁸ 大路あれすたれて旅客たえ、敵は契約をやぶり、諸邑をなみし、人をものかずとせず、⁹ 地はうれえおとろえ、レバノン**は**恥らいて枯れ、シヤロンはアラバの如くなり、バシヤンとカルメルとはその葉をおとす。¹⁰ エホバ言い給わく。われ今おきん、今たたん。今みずからを高くせん。¹¹ なんじらの**い**きむところは**枇糠**のごとく、なんじらの生むところは藁のごとし。なんじらの氣息は火となりてなんじらを食いつくさん。¹² もろもろの民はやかれて灰のごとくなり、荊のきられて火にもやされたるが如くならん。

¹³ なんじら遠くにあるものよ、わが行いしことをきけ。なんじら近きにあるものよ、わが能力をしれ。¹⁴ シオンの罪人はおそる。戦慄はよこしまなる者にのぞめり。われらの中たれか焼きつくす火に止ることを得んや。我儕のうち誰かとしえに焼くるなかに止るをえんや。¹⁵ 義をおこなうもの、直をかたるもの、虐げてえたる利をいといすつるもの、手をふりて賄賂をとらざるもの、耳をふさぎて血をながす謀略をきかざるもの、目をとじて悪をみざる者。¹⁶ かかる人はたかき処にすみ、かたき磐はその櫓となり、その糧はあたえられ、その水はともしきことなからん。

¹⁷ なんじの目はうるわしき状なる王を見、とおくひろき国をみるべし。¹⁸ 汝の心はかの懼しかりしことどもを思いいでん。會計せし者はいづくにありや。貢をはかりし者はいづくにありや。櫓をかぞえし者はいづくにありや。¹⁹ 汝ふたたび暴民をみざるべし。かの民の言語はふかくして悟りがたく、その舌は異にして解きがたし。²⁰ われらの節会の邑シオンを見よ。なんじの目はやすらかなる居所となれるエルサレムを見ん。エルサレムはうつさるることなき幕屋にして、その杙はとしえにぬかれず、その縄は一すじだに断たれざるなり。²¹ エホバ我らとともに彼処にいまして稜威をあらわし給わん。斯てそのところはひろき川ひろき流れあるところとなりて、その中には漕舟もいらず巨艦もすぐることなかるべし。²² エホバはわれらを鞫きたもうもの、エホバはわれらに律法をたてたまいし者、エホバはわれらの王にましまして我儕をすくい給うべければなり。²³ なんじの船纜はとけたり。その帆柱のもとを結びかたむることあたわず。帆をあぐることあたわず。その時おおくの財



をわかし^{あしなえ}跛者^{えもの}までも掠物^{えもの}あらん。24 かしこに住めるものの中われ病めりという者なし。彼処^{とが}における民の咎^{とが}はゆるされん。

●人は人にして神にあらず

第二回は31章から33章までです。

1 助けをえんとてエジプトにくだり、馬によりたのむものは禍^{わざわ}いなるかな。

これが「禍害^{わざわい}なるかな」――「ホーイ」という――の第五番目の言葉です。「馬」というのはエジプトの軍馬のことです。アッシリヤに対してエジプトの勢力で向かつて行こうとするのは大間違いだと、イザヤが言っているわけです。これはイザヤの預言です。

戦^{いくさ}車^{くるま}おおきが故にこれにたのみ、騎兵はなはだ強きがゆえに之にたのむ。

されどイスラエルの聖者をあおがず、エホバを求めることをせざるなり。

昔、出エジプトのときに戦車が追っかけてきましたね。ところが、モーセは神さまに依り頼んで、老若男女の群れをひきつれて、背水の陣でなくて、前面に水を持っている、常識的にはもう極まった境地で、しかし、そこで神さまの御力が働いて、紅海を渡っていくことができた。手をおろせば、また水が塞いで、エジプトの軍勢はみな溺れてしまったという、驚くべきことがあった。イザヤにしてみれば、そのようなモーセのあの信仰を忘れたかというわけです。だから、特にイザヤが神さまのことを「イスラエルの聖者」「カードーシュ」と呼んでいる。

2 然はあれどもエホバもまた智慧あるべし。

これはちよつと反語的な意味です。お前たちが思うような智慧ではないぞということ。

かならず禍害^{わざわい}をくだしてその言をひるがえしたまわず。

神に背くものに対してですね。

起^たちてあしきものの家をせめ、

「悪しきもの」と言うときには、ユダヤ人は、「不信」と同じことです。不信仰のことを「悪しき」あるいは「愚か」という言い方をする。

また不義を行う者の助けをせめ給わん。

「不義を行う者の助け」というのはエジプトのことです。エジプトの助けをすると、お前たちはやられるぞと。即ち、「エジプトが逆に私の手先になる」ということを――アッシリヤにしろ、エジプトにしろ、みんな神さまの手先ですから――神さまの方からは使い方がいろいろになるわけです。

3 かのエジプト人は人にして神にあらず、その馬は肉にして霊にあらず、エ

ホバその手^みをのぼしたまわば助くるものも躓^{つまず}き、

即ち、エジプトが躓^{つまず}く。

たすけらるる者も



ユダも、

たおれてみなひとしく亡びん。

エジプトもユダとともに、神に依り頼まないかぎり、亡びる。この3節は特に、非常に大事な句です。「エジプト人は人にして神にあらず」という。日本人は人にして神にあらず。その馬は肉にして霊にあらずと。「肉」というのは、地上のものを頼りにすることが全部、「肉」です。神を頼りにし、神につくものは、これがみな「霊」です、どんなにつまらないことをしていても。また、どんなに立派そうなことをやっても、人間本位であるものは、これは「肉」なんです。パウロは、その使い方がはつきりしてます。もうイザヤ書ではそれがでている。

だから、人間中心は、民主主義なんてのは、本当は困った言葉なんです。

「神主主義」

でなくてはいけない。「主義」という言葉は私は嫌いですけども。「デモクラシー」の前に、

「テオクラシー」

があるのを、神さまがあるのを忘れてるのが一般の日本人ですから。全然この言葉が曲がって一面的にしかとられていない。アブラハム・リンカーンは、

「アンダー・ゴッド」(神の下に)

と言っている。

「神の下における、人の、人による、人のための、政治を」

ということだと。「神の下に」と、はつきりあの演説の中に書いてある。あの、

「青年よ、大志を抱け」

も、「イン・クライスト」「キリストに在って」とクラークはその気持をもって言っていたわけです。その「イン・クライスト」がぬけてしまっている。

「キリストに在って、大志を抱く」

ことは、神の栄光を求めることで、自分の栄光を求めることではないですから。

内村先生がこの預言書を読まれて、

「自分は預言書によって本当の愛国を知った。新約聖書においては魂の救いを受けとつ

たけれども、旧約の預言書においては、愛国がどういうことであるかを学んだ」

ということを言っておられますが、正にそのとおりです。預言者の愛国は本当に神につける愛国であって、手放しの愛国ではない。また、日本では、愛国と言うと、すぐ国粹的な気持の言い方としてとる。とんでもないはなした。本当の意味の愛国です。

「私は二つの」(ジーザスとジャパン)を愛する」

と内村先生は言いましたが、全くそのとおりです。



● 今たちかえるべし

4 エホバ如此われにいいたもう。獅のほえ、^{わかし}壯獅の獲物をつかみてほえた
けれるとき、^{あまた}許多のひつじかい相呼びつどいてむかいゆくとも、その声によ
りて^{くじ}挫けず、その^{かまひす}喧譁しきによりて^{おく}臆せざるごとく、

というのは、猛獣がきても、本当の牧者はそんなことを恐れないと。

万軍のエホバくだりてシオンの山およびその岡にて戦い給うべし。

アッシリヤの大軍に対して神さまが戦うと。4節からは神さまの救いの方にかかってくる。

「立ち帰れば、お前たちは救われるけれども、立ち帰らなかつたら大変だぞ」

と、預言者はしょっちゅうそのことを言っているわけです。

5 鳥の雛^{ひな}をまもるがごとく万軍のエホバはエルサレムをまもりたまわん。こ

れを^{すぎこし}護りてこれを^{すぎこし}い^{たす}踰越してこれを援けたまわん。

やはり、「^{すぎこし}踰越」という言葉は出エジプトを思い出しますね。これは出エジプトの^{すぎこし}過越の
ことを彼は心に置いているわけです。出エジプト記12章にちゃんと書いてあります。

6 イスラエルの子^{こち}輩よ、なんじらさきには甚だしく主にそむけり。今たちか

えるべし。

この「アッター」「今」という字は非常に強い。この6節の

「今たちかえるべし」

という、このただ一つの言葉をよく記録しておいてください。

「今ここにおいて」

と言われる言葉がありますが、我々の信仰の現実はまさにいつも「今」である。ありがた
いことには、いつも今というものがあるわけです。今という時がないわけではない。昨日と
いうのはもう昨日しかないのだし、明日というのは明日しかないけれども、今というのは
いつもある。おもしろいね、これ。今というのはいつもある。「永遠の今」というわけです。
しかしながら、今というひとつの瞬間は非常に大事なので、いつでも今があるから今をい
い加減したら、今度は、今がなくなってしまう。いつでもあるものが、いつでもなくな
ってしまう。

「聖霊を受けるのは、まあそのうちに」

ではないので、

「今日、今、ここにおいて」

ということですよ。

私も無教会時代に、

「聖霊とは一体、何だろうか？」

と、一番先に私は冥想したときに――あの『無の神学』に書いておいたが――最初に「祈
りの哲学」というのを書いて、そのときにもう結論が聖霊にきているので、私は自分でび



つくりした。もう五十年も前に冥想の世界で結論したが、現実のところにはまだ行っていない。かすんでいるような世界だったけれども。

私は、無教会にもまた一般の教会の方にも言いたいですよ、正直。

「本当に十字架を受けとっていますか？」

ということ。そうしたら、どうしても、聖霊は来ざるを得ない。なにかしら、空気は見えない。けれども、私たちは空気を吸っている。なにかしら、魂がこの御霊の気に生かされている。「ああ、これはちがう」ということが、もう聖霊の世界です。

十字架がいい加減だと、いつまでたつてもダメです。また、十字架がいい加減でも、なにか、祈り三昧で聖霊的にはなるけれども、しかし、それは霊であっても、キリストの霊ではない。キリストの霊は贖いを通った霊です。でなければ、キリストは十字架におかかにならない。かつたんです。もうはつきりしている。

今、キリストに立ち帰る。今、十字架の門の中に入っていく。そうすると、その先は詩篇23篇のごとく、緑の牧場、憩いみぎわの汀です。聖霊の空間です。

●神剣

⁷なんじらおのが手につくりて罪をおかしし白銀のぐうぞう、黄金の偶像をその日おのおのなげすてん。

出エジプトの頃からもう既によく偶像を造っていましたから。

⁸爰にアツスリヤびとは剣こるぎにてたおれん。されど人のつるぎにあらず、剣かれらをほろぼさん。

これは神の、神剣です。正に神剣です。

「お前たちは剣を取ると、剣で滅びる」

と、キリストは言われました。人剣ではダメなんだ。神剣です。我々はこの神剣流で戦うわけです。無刀です。無剣。剣は無い。宮本武蔵も両刀使いしながら、あれは一刀なんです。一刀でありながら、それは無刀なんです、本当の世界は。

こういう話がある。四国の殿様に従って、お茶の先生が江戸にやってきた。不忍池のあたりに来たら、剣道の相当うまいやつが果たし合いを挑んできた。男だから、それは受けて立つ。

「ただ、ちょっとお待ちください」

と。近所の指南番の所に行つて、

「今、果たし合いを挑まれたが、どういようにやったらいいでしょうか」

と問うた。剣道の指南番は、

「あなたは何をしてらっしゃいますか」

「私はお茶の道をやっています」



と答えた。

「ああそうですか。それではお茶の道の極意の世界にあなたの心境を入れなさい。そして、大上段に構えてごらんなさい。向うが打つてきたら、打ち下ろせば、相打ちか勝つかどちらかです」

「わかりました」

と。それで行って、茶道の極意の境地に入って大上段に構えたら、相手が、

「参った、お見それいたした」

と。戦わないで勝ってしまったわけです。これが本当の神剣流です。

即ち、どの道でも本当に達するところは、絶対境に入ること。絶対界に自分の魂が入らないかぎりには本ものにならない。道の世界は、それがお茶の道であろうと、お華の道であろうと、何であろうと、極道です。極まる道、至道。至道無難の道。「板極道」という、棟方志功がやったのは正に極道です。極道、至道、それはみんな絶対的な境地です。

そうすると、相手が参ってしまう。それで、その相手は茶の先生に、

「何をしたらっしやいますか」

「いや、茶の道だよ」

と。それからその弟子になったという。これは本当の話です。

そういう、

「剣かれらをほろぼさん」

というのは、

「私の天剣が彼らをほろぼさん」

ということですよ。

●地水火風の如く

されど世の人のつるぎにあらず。かれら剣のまえより逃げはしり、その^{わか}壮きものは^{よぼろ}役丁^いとならん。かれらの^い磐はおそれによりて^す逝去^き、その君たちは旗をみてくじけん。

「磐」というのは、依り頼むもので、これはアッシリヤです。我々の磐はキリスト。28章にもたたみかたけて書いてある。新約聖書にもあそこは非常に出てくる。磐だとか石だとかいう表現でね。

その君たちは旗をみてくじけん。

「旗」はエホバの旗です。この「旗」という言葉がときどき出てきます。国旗というのはそういうところからも来ている。始めは宗教的な意味だね、この「旗」というのは。

日本の国旗は世界に最高の国旗ですよ。単純な偉大さという。真理は一番単純なところにある。何も難しくない。私はこの国旗が好きでしょうがない。お正月は、私は元日から



三日間、国旗を掲げておくんだ。「あの野郎、国粹か」なんて思われるかもしれない。私はあんなことはケチケチしない。三日間立てたらしいじゃないですか。

「日本人は太陽を心に持て。心臓が太陽になれ。陰がなくなるぞ」

というわけです。内側が光れば陰がなくなる。外から光を受けているから陰があるんだけど、内に光を受けとれば陰がなくなる。だから、

「汝らは世の光なり。お前たちには陰はないぞ」

と、キリストは言ってらっしゃるわけだ。ありがたくてしょうがない。

キリストの言葉は――何も力む必要はないですよ、力んだらダメです――柔軟にその中に自分を入れることが一番大事なんです。水の如くなれ、空氣の如くなれ、氣の如くなれ、火の如くなれ、また、大地の如くなれと。

だから、「地水火風」というのは素晴らしい真理を持っている。これを冥想するだけでも大変なことになる。大地は一切のものを担う。水は流れてやまず、もう千変万化する。水は方円に従う。丸い入れ物の中では丸くなるし、四角い入れ物の中では四角くなるし、ちつともこだわらない。無形なんです。無形が一切の形を持っている。無形のものは一切の形に化する。それはメタモルフォーゼを自由自在に起こす。樂に変形する。ゲートはこの「メタモルフォーゼ」という言葉が非常に好きです。一即無限、一即多。もうそうになったら、樂でしようがないですから。

水・火・風は全部、聖靈のことを言っているじゃないですか。もう清濁合せ吞むどころじゃない。この大地は全部これを引き受けてしまう。そして黙ってみんな担ってしまっているよ、どんなビルディングでも。そのかわり、大地がひとたび揺れたら大変なことになる。地震というやつは。いい気な顔しているとね。地震が起きるのは、本当は靈震が起きる。ある所で起きた地震は、私は確かに靈震だと思っている。すぐ直覚しました。

こはエホバの御言なり。エホバの火はシオンにあり、エホバの炉はエルサレムにあり。

ここにも「火」が出ているね。この「火」は「アリエル」です。祭壇の炉の火です。「エホバの火」「エホバの炉」というのは同じことを別な言葉で言っている。「アリエル」というのは、「神さまの祭壇の炉」ということ。それは、

「ひとたび私が立てば、アッシリヤ軍はこのようなにしてやつつけてしまうぞ」

と言って、イスラエルを、ユダを大いに励ましているわけです。ユダは徹底的に、預言的に審かれる。やつつけられるけれども、必ずそのあとから救いがくる。神さまは審きつぱなしではない。「を審く」というのは、「のために審く」ということなんです。

「お前たちのために審くぞ。お前たちを審きながら、お前たちのために審くぞ」と。それは最後は、神さま自身のためなんです、「わが栄光のために」ということ。



●メシヤ王国

それから今度は、32章にいきます。

「茲^{こゝ}にひとりの王あり。

これはメシヤです。

正義をもて統治^{すべ}め、その君たちは公平をもて宰^{つか}さどらん。

ここにも、「正義、公平」「セデカー、ミシユパート」という言葉が出ている。メシヤ王国は必ずそうなんです。

2 また人ありて風のさけどころ暴雨^{おおあめ}ののがれどころとなり、早^{かわ}ける地にある水のながれのごとく、倦^うみつかれたる地にある大いなる岩陰^{いわかげ}の如くならん。

いつも対句で言っている。これは詩ですから。預言はたいてい詩なんです。

3 見るものの目はくらまず、聞くものの耳はかたぶけきくをうべし。

非常に目も耳も霊的になつてきて、よく見え、よく聞こえるという。

4 躁^{さわ}がしきものの心はさとりて知識^{ちしき}をえ、吃^く者の舌はすみやけくあざやかに語るをうべし。

だいたい、この35章にだんだん向かつていくような内容だな。ありがたい音信ですね。預言者の言葉は、まだ現実に行われなことを断定的に言っている。やがてそういうときが来るぞと。彼ら預言者も知らないですから、キリストのことはもちろん。イザヤ書53章にしたって、キリストのことは知らない。けれども、そういうふうに言わされている。だからはつきり、神さまの言葉です。

5 愚かなる者はふたたび尊貴^{とうとし}とよばるることなく、

この「尊貴^{さうき}」というのはいわゆる貴族階級式なことです。

狡猾^{さかしら}なる者はふたたび大人^{たいじん}とよばるることなかるべし。

「大人^{おとな}」というのはシナ式な言い方だな。

6 そは愚^{おろか}なるものは愚^{おろか}なることをかたり、その心に不義^{よこしま}をかもし邪曲^{よこしま}をおこない、エホバにむかいて妄^{みだり}なることをかたり、飢^うえたる者のこころを空しくし、渴^のけるものの飲料^{のみもの}をつきはてしむ。7 狡猾^{さかしら}なるものの用いる器はあしし。彼あしき企図^{くわだて}をもうけ、虚偽^{いつわり}のことばをもて苦しむ者をそこない、乏^としき者のかたること正理^{ことわり}なるも尚^{なほ}これを害^{そこな}えり。8 とうとき人はとうとき謀略^{はかりごと}をもうけ恒^{つね}にとうとき事をおこなう。

ここところは、はつきり両方を分けて書いてあるわけだな。けれども、今、5節から読んでいるところは――これは学者の説ですが――5節以下は、どうも、イザヤのここの所の前半にはふさわしくないと行って、カットします。あるいはそうかも知れません。

9 安逸^{やすら}における婦等^{おんなたち}よ

「やすらか」といつても、これは安逸なことです。



おきてわが声をきけ。思い煩^{わづら}いなき女^{むすめたち}等よわが言に耳を傾けよ。

これはいい加減な婦人たちに向かつて言っている。いい意味において言っているんじゃないですよ。

10 思い煩^{わづら}いなきおんなたちよ一年あまりの日をすぎて摺^{おの}きあわてん。

要するに、いい気になっていいる人たちということです。

そは葡萄^{かりいれ}の収穫^{かりいれ}むなく、果をおさむる期^{とき}きたるまじければなり。11 やすら

かにおる婦等^{はだか}よふるいおそれよ。おもいわずらいなき者よおののきあわてよ。

衣をぬぎ裸^{はだか}体になりて腰に鹿^{あらたえ}服をまといえ。12 かれら良田^{よきはた}のため実りゆたかな

る葡萄^{かりいれ}の樹のために胸をうたん。

棘^{おどろいばら}と荊^{おどろ}が地に生えてくるようことが書いてある。

13 棘^{おどろ}と荊^{いばら}わが民の地にはえ、楽^{まち}しみの邑^{まち}なるよろこびの家々にもはえん。

それから今度は、15 節から赴^{むか}きが変わつてきます。

15 されど遂^{みな}には霊^{たま}うえより我^{われ}儕^しにそそぎて、

預言書というのは、あるグループ、グループでもつてパツパツと変わつていく。時間的に

継続しているのではない。

荒野はよき田^{はた}となり、良田^{よきはた}は林のごとく見ゆるとききたらん。

非常に栄光の姿です。

16 そのとき公平はあれのにすみ、正義はよき田におらん。

こういう言い方が実に――何といえますかね――普通の文学では出てこない。

「公平があれのにすみ、正義はよき田におらん」

なんてね。だから、ユダヤ人にとつては、預言者にとつては、公平とか正義とかは概念ではない。具体的な事態を言っている。非常に擬人化している。人間界が神についていれば、自然界もそれで恵まれていく。人間界が神から背けば、自然界も荒れていく。そういう因果関係を持っています。

バラはきれいだね。けれども、刺がある。

「バラよ、お前はせっかくきれいで、いい香りもしているのに、どうして刺を持っているか。刺はもうない方がいいね」

と言って祈った人がある。そうしたら、その次に出てくるバラには刺がなかったという話です。祈りが働きかける。作物をやっている人も、本当に祈れば、収穫が、稔りが違ってくる。稲を見れば稲となり、麦を見れば麦となる。そういう祈りです。

自然界と自分とが融合していた偉大な詩人はゲートです。神さまの中にも自然が溶け込んでいる。「神と自然と私」が融合関係なんです。だから、ゲートという詩人は凄い。ゲートのものを読んでいると本当に限らない。

17 かくて正義のいさおは平和、せいぎのむすぶ果はとこしえの平隠^{おたやか}とやすき



なり。18わが民はへいわの家におり、思いわずらいなき住所^{すみか}におり、安らかなる休息所^{いやすところ}におらん。19されどまず電^{ひよう}ふりて林^まくだけ邑^{まち}もことごとくたおるべし。

これはまた審判の面がパツと出てきたね。

20なんじらもろの水のほとりに種をおろし、牛および驢馬の足をはなちおく者はさいわいなり。

農民に対する思いやりのわけです。

●因果応報

次は33章です。最後の6番目の「禍害^{わざわい}なるかな」です。

「禍いなるかな、なんじ害^{そこな}われざるに人をそこない、欺^{あざむ}かれざるに人をあざむけり。

ダメだと。「欺かれたるものは幸いなるかな」だな。

なんじが害^{そこな}うこと終らば汝^{みづか}そこなわれ、なんじが欺^{あざむ}くことはてなば、汝^{みづか}あざむかるべし。

因果応報だ。そのときには逆に今度はやつつけられるぞと。

この「なんじ」という言い方は、複数に対しても単数で言ったりしますから、この場合の「なんじ」はイスラエルの、特に支配階級やなんかのことですが、そうであると同時に今度は、預言者がその民の罪を自分でもって負って、神さまから執り成しの意味でもって「なんじ」と言われて、

「私がお前たちの代わりに審判を受けるぞ」

と。預言者はそういう角度も持っています。審判しながら、その審判を一緒に受ける。むしろ、どん底で受けている。そうなんです。預言者の審判の預言は実は、エホバの審判を民に伝えながら、

「自分もその民の一人だ。自分はどん底でこれを受けとっているからその審判を言うんだ」

という角度が本当の預言者の角度です。決して高ぶっていません。パウロが、

「我は罪びとの首^{かしら}」

と言ったのが、やはりそうです。

召団讃美歌(B17「すべての人に」1983年8月31日作)を私は書きました。これは合唱する讃美歌ではない。これに共感する方は一人で歌っていただきたい。「最大の芸術家」という文章(「エン・クリスト」誌第16号所載)も大事な文ですから、よく読んでください。もちろん、神さまのことです。私は一つの文章を書いても、いつもそれが絶筆の気持なんですよ。いつ仆れてもいい。



² エホバよわれらを恵み給え、われらなんじを俟ち望めり。
「待ち望む」も「信頼する」も同じこと。

なんじ朝ごとにわれらの臂となり、また患難のときにわれらの救いとなりたまえ。

神さまの、キリストの懷の中に入って寝ると、朝起きるときに力がくる。本当に、力を持つて起き上がってくる。どんなことがあっても、どんな問題があっても、嫌なことがあっても、何でも、いい。キリストの懷の中で寝てくださいよ――詩篇の3篇、4篇がそれでしょ――そうしたらば、薬に眠れる。「私は眠れない」なんて、睡眠剤なんて全然いらん。とにかく、日本人は薬を使いすぎるね。キリストという最大の薬が、唯一の薬があるのに、そのキリストという薬をいい加減にして、人間のつくった薬ではしょうがないよ。そして、何とか検査なんて、さんざん検査するとかえってくたびれてしまう。私も、老人のあれ(健康診断の通知)を持っっているけれども、全然そんなものは問題にしないからね、右から左へ紙屑カゴに入れてしまうんだ(笑)。どうして、こんなことになってしまったかと思う。しょうがない。

●神をおそるるは国の宝なり

³ なりとどろく声によりてもろもろの民にげはしり、なんじの起ちたもうに
よりてもろもろの国はちりうせぬ。⁴ おおねむしのものをみつゝすがごとく、
人なんじらの財をとり尽くさん。また蝗のとびつゝうがごとく、人なん
じらの財にとびつゝうべし。⁵ エホバは最たかし高處にすみたもうなり。エ
ホバはシオンに公正と正義とを充せたまいたり。⁶ なんじの代はかたうち、
救いと智恵と知識とはゆたかにあらん。

こここのところはたたみかけて、「公正」と「正義」、「救い」と「智慧」と「知識」という言葉が出てくる。

エホバをおそるるは国の宝なり。

これは大事な言葉だね。

「我々ドイツ人は神を畏れる。その他何ものを世界でおそれるものはない」という、ビスマルクらしい言葉だ。「ただ神をおそれる」という。彼もいつも聖書は持つて読んでいました。ビスマルク、グラッドストーン、リンカーンなんてのは本当に一流の政治家だね。あんな政治家はちよつとないものな。みんな神を畏れた人たちです。

ダメだよ、もう日本は。絶対界を魂が持たないから。左顧右眄しているだけで。まあ、日本で一番大事なのは、何といつても、福音なんです。だから、あなた方一人びとりは伝道者ですよ、本当に。一人びとりが伝道者です、身をもって道を伝える人です。

もう神さまの他におそれるものはない。



「人を救わないではいられない、助けないではいられない、やむにやまれざるなり」

とパウロが言った。このやむにやまれざる衝動なんです。そうすると、本ものには必ず、人間の魂はそれに感ずるんです。

「エホバをおそるるは国の宝なり」

という。日本にはこの宝がない。

7 視よかれらの勇士は外にありてさけび、和をもとむる使者はいたく哭く。

これはイスラエルの軍部だろうな。

8 大路あれすたれて旅客たえ、敵は契約をやぶり、

そうですね、こっちはユダです。

諸邑をなみし、人をもののかずとせず、^{まちまち}地はうれえおとろえ、レバノン^{なげ}は恥らいて枯れ、

そういうことになる。レバノンはあの香柏の森林が素晴らしい。それが枯れてしまうという。シャロンはアラバの如くなり、

「アラバ」というのは死海に面したところの荒野です。シャロンも荒野になってしまふと。バシヤンとカルメルとはその葉をおとす。

これもやはり森林で有名な所です。これもみんな落葉してしまふ。

「ダメだ。もう国は滅亡に瀕しているぞ」

というわけだ。正直、イスラエルがやられて、今度はユダがやられるわけです。イスラエルがアッシリヤにやられ、ユダはバビロニアにやられてしまふ。紀元前721年と、こっちは前696年とか。第二の捕囚は前584年か。

10 エホバ言い給わく。われ今おきん、今たたん。今みずからを高くせん。

これは大変な言葉です。私は今日、題に「本願圧倒」と書いたのは、この句によるんです。

「われ今おきん、今たたん。今みずからを高くせん」

という。神さまが、

「今、私は起きる。今、立つぞ。今、みずからを天に上げるぞ」

というような、ユダヤ人は神さまを非常に人格的にとっている。だから、霊的人格なんです。「人格」と言ったって、「神格」ですけれども。我々は霊的人格にならないと。この霊的人格は暁の星よりも少なくなってしまうた。皆さんはこの霊的人格者となっていたいただきたい。

「地上において一番大事なのは人格（ペルゾーンリッヒカイト）である」

とゲーテの詩の中にあります。それが霊的（ガイステイッヒ）な人格ということです。

●本願の内容はキリストの十字架と聖霊

モーセの第一言、第二言がそうなんだから。



「汝、わが顔の前に何ものをも神とすべからず」とは、

「私の目の前では、何ものも神ではないぞ。他の神々は他の民にはあるけれども、私の面前では私だけがお前の神だよ」

というのがエホバの神さまです。

「二対一の関係だ」

ということです。一対一の関係が、これを人格関係という。

時々、申し上げますけれども、私が幕屋の構造（三角錐体）で書くのは、この大黒柱はキリストの柱だ。a b c の関係は、a と b の関係も、b と c の関係も、a と c の関係も、それぞれ比較を絶した関係なんです、人格関係というのは。a は b と c を比較してはいかん。a と b との関係、c と b との関係、みんなこれは比較できない。なんとすれば、一人びとりは天下一品なんです。a に代わるものはない。b に代わるものもない。c に代わるものもない。そういうものを人格者という。神さまはそういうふうに、一人びとりを代用がきかないようにしたんです。物は代用がきくけれども、人間は代用がきかない。なぜかというと、この絶対者によつてつくられているから。絶対者とのこの綱が切れたらダメなんだ。

「宗教」「レリガール」

というのは「再結」という意味だから、

「絶対者と結び直しをしてください」

ということだ。

そういうわけで、一対一の関係が人格なんだ。

「汝はわがために偶像を刻んではいかん」

という第二言は、これは霊神だから。第一言は人格神。この人格神と霊神は離すことができない。

そのことはキリストがサマリヤの女と話しているところにちゃんと出てきている。

「神は霊なれば、霊とまことをもって拝すべし」

という。神は霊であると。また、本来に一対一の関係でキリストは神と話している。人格です。この「まこと」というのは「信実」ということで、裏切らない関係です。一対一のそういう関係、いわゆる比較をしない関係、それぞれの特殊性を持った関係です。

そうやってきたら、そこにはもはや問題はなくなる。「誰がどう言った、こう言った」なんて、くだらないことが言えなくなる。第三者のことをなんのかんの言っているのは、みんなおかしくなる。

「われ今おきん、今たたん。今みずからを高くせん」

と神さまがそう仰った。それでは、私たちはその真似をしていいか。どっこい、そうはいかん。どうしたらいいんですか。神さまが起きたら、こっちは平伏さなくてはいかん。神



さまが立ったら、こっちは倒れたらいい。神さまが高くしたら、降参したらいい。

「われ今、伏す。われ今、倒る。われ今、降参せり」

と。それでなければ、この神さまの言葉は本当に読めないことになる。そのような平伏しにならなかつたら、「神をおそれる」なんて言ったってダメですよ、観念になってしまう。どのようにして、倒れたり、伏したり、降参するんですか。キリストの十字架の前にです。この十字架の贖罪の死をもって私たちを愛してくださった、このキリストの十字架の愛の前に私たちは伏し、倒れ、降参する。愛に圧倒される。

本願の内容はキリストの「十字架と聖霊」です。この「十字架と聖霊」が本願の内容で、これに圧倒されるから、もうたまらんです…(異言)…。

そういう、キリストの――もう、私は言葉にならん――私は聖書に驚嘆驚倒して生きている男です。「研究」では絶対にありません。読むことが直ちに祈りです。

¹⁰ エホバ言い給わく。われ今おきん、今たたん。今みずから高くせん。

という、この三段構えでもって、

「今、今、今」

と言って、神さまが立ち上がってくださったら、もう何がどうなったっていいじゃないですか。

キリストは本当に平伏し倒れて、神さまに降参したかたです。だから、逆に本当に立つた人です。それで今度は私たちに、

「お前を本当に立たせてやるぞ。本当にお前をこの霊界に高く上げてやるぞ」

ということがあとから響いてくるんです。どん底に立つと、「罪びとの首^{かしら}」という事態に本当に入ると、もの凄いことになっていく。罪びとの首は、キリストがなりたもうた。恩寵の事態です。

● 体知体感

そういうことで、「お前たちのやつていることはみな枇糠^{もみがら}のようだ、藁^{わら}のようだ」と、預言者が言っている。みんなダメになると。

¹¹ なんじらの孕む^{はら}ところは枇糠^{もみがら}のごとく、なんじらの生む^うところは藁^{わら}のごとし。なんじらの氣息^{いき}は火となりてなんじらを食^くいつくさん。¹² もろもろの民はやかれて灰のごとくなり、荊^{いばら}のきられて火にもやされたるが如くならん。

¹³ なんじら遠くにあるものよ、わが行いしことをきけ。なんじら近きにあるものよ、わが能力^{ちから}をしれ。

これはまた大変な言葉だ。「遠くにあるものよ」と言うと、

「私は遠くにいるんだろうか、近くにいますか」

なんて、またそんな考え方をします。あるときは遠くにあります。あるときには近くにあり



ます。どっちでもいい。遠くにあるが、近くにあるが――言葉は二つの部類に分けていますけれども――我々はあるときには遠くにある。お互いさまもそうだな。今はこうやって近くにあるけれども。この集会が終ると、遠くにあつてしまふ。遠くなろうと、近くであろうと、神さまの行いを本当に聞け、霊の耳で聞け。また、全身でもって受けとれと。「力を知れ」と言つたつて、力を本当に知るためには、受けとらなければ、知れません。そうでないで力を知つたら、それは観念の知り方だ。キリストの力を知るのには、

「なんだ、福音書にはこんな凄いことが書いてあるが」といつて知つたのでは、本当の「知る」ではない。

福音書を身読^{しんどく}して、ドラマの中に入つて、キリストの力を受けたら、本当にキリストの力を知ることになる。「知る」とは――こんな言葉はないけれども――体知する、からだで知らなければ。体知する。体知、体感しなくてはいいかん。体知、体感をしないことには、知るにもならない。ゲエテが、

『ゲフュール・イスト・アツレス』（体感は一切である）

と言つたのはこの境地です。「情感は一切である」という。あれを普通は「情感」と訳すけれども、私は「体感」と訳す。

「体感は一切である」

と。からだで受けとらなかつたらダメなんだ。「からだで」ということは「全存在で」ということです。全存在で受けとりなさいと。すべてが全存在的、それを「全的」という言い方をする。

遠くにあるが、近くにあるが、同じことだと。あるいは逆比例するかもしれない。遠くなると逆に親しくなるかもしれない。私の兄貴はもう遠くにいつてしまった。60何年前に。けれども、非常に近い。

「今」というのは、これは時間ですよ。昔も今も一つになつてしまふ。そうでしょうが。この預言者は二千何百年前だ。それが今として、昔を今として、私たちは読んでいるわけでしょ。今度は、未来も今として受けとるんですよ、「終末」を。歴史の終末の世界を今として受けとる。過去も未来も全部、今として受けとる。時間も空間も、三次元の世界も、もうひとつ大きな絶対次元の中に入つてしまふ。まあ始末のわるい人間です、小池なんてのは。しょうがないよ、何と言われたつて。

●本願压倒

そういうことで、昔も今も、遠きも近きも――もうひとつ言おうか――外も内も、これが同じ。超絶の神さまは内在の神さまとなつてくださるじゃないですか。ちゃんと書いてある。

「神さまは一切のものの上にいまし、貫き、また我らの中にある」



と、エペソ書の中にある。超在、貫在、遍在、内在。自在です、自由自在。そういう自由無碍な境地が一般のキリスト教にない。それでなんだかも、いわゆる信条になったり、言葉の上でもって

「これはどういう意味だ」

なんていろいろ詮索してみたり、本当のカギをつかまえてないからね、本当の根底のところを。

だから、もうそうなつてくると、キリストは即無限無量だから、禪宗を読もうが、浄土真宗を読もうが、真言宗を読もうが、何だつてみんなつかんでしまう。一流の坊さんたちのものがおもしろいよ。そうすると、

「小池はキリスト教と仏教とをごっちゃにしている」

なんて。なにをごっちゃにしているか。冗談じゃない。キリストの絶対の光が全部これを包摂してしまう。宇宙的ですからね、イエス・キリストは。

大きな魂になってくださいよね。大きな魂で、しかも本当に平伏して、弾力性のある魂に。もう何とも言えないですよ。ここにたくさん花があるけれども、どの花見ても、その花になれるような魂にならなくては。

「私はバラが好きで、他はいやだ」

なんて、そうじゃない。何でもいいよ。どれにでもなつていく。溶け込んでしまう。万人にそういうように溶け込んでいく。

ゲーテのお母さんというのはそういう魂だった。どの人をも本当の意味で愛していた。また、どの人にも愛されていた。人の悪いところは見ない。それは神さまにお任せして、いところだけ見ている。本当の愛は、もう溶け込んでいる愛なんです。海の水を見たって、塩がどこにあるかわからないよ。溶け込んでしまっているから。そういうわけです。

昔を今とし未来を今とし、遠きを近きとし近きを遠きとし、外を内とし内を外とする。ゲーテの言葉にもある、

「私には内外がない」

と言っている。内外がないということは、内外相即しているということなんです。全部「即」している。バラバラではない。現象即本体というように、現象において本体をつかんでしまう。だから、何を読んでも、ゲーテはその本質をパツと直感する。植物学でも、色彩学でも、鉱物学でも、人体学でも、聖書のことでも。ヘブライ語をよく勉強したからね――まあ、ヘブライ語を勉強してもしなくても、そんなことはどうでもいいけれども――とにかく、旧約を読んで、「これはちよつと」と、新しいものを彼は発見するからね。内観できる。内側からものが見える。そして、審かない。

本当に見る人は、必ずそれを救いあげていくような見方をする。救いあげていく見方をしないものは本当の愛じゃない。人を審いていると、必ず自分が苦しくなる。



「^{さば}審くなかれ。審かれざらんがためなり」

とキリストが言われたけれども、

「自分自身が苦しくなるよ」

ということですが、もうひとつ言うと。

この10節を読んで、私は圧倒されたから、それでこの

「本願压倒」

という題になった。本願は压倒するんです。圧倒されてぶつぶぶされると、ありがたいことになる。御霊の権威は、ぶつぶぶされていなければ、本当の御霊の権威はきません。自分を何かと思っているうちはダメです。

●包みの霊

14 シオン^{つみびと}の罪人はおそろ。戦慄^{おののき}はよこしまなる者にのぞめり。われらの中たれか焼きつくす火に止る^{とどま}ことを得んや。我儕のうち誰かとこしえに焼くるなかに止るをえんや。

そう言っているねと。これは二重括弧だからね。

15 義をおこなうもの、

というのは、「義を歩くもの」ということ。

直^{なおき}をかたるもの、虐^{しえた}げてえたる利をいといすつるもの、

「虐^{しえた}げてえたる利」というのは、压制者の利ということです。压制者が虐^{しえた}げて得たそんな利は、いとい棄ててしまう。そんなものはごめんだと。

手をふりて

というのはもちろん、断る意味です。

賄賂^{まいない}をとらざるもの、耳をふさぎて血をながす謀略^{はかりごと}をきかざるもの、

みんな現在分詞の名詞的用法で書いてある。

目をしてじて悪をみざる者。

いいね、これ。ゲーテのお母さんみたいな。

16 かかる人はたかき処にすみ、かたき磐^{いわ}はその櫓^{やぐら}となり、

「かたき磐」はエホバのことです。エホバ自身が櫓^{やぐら}となってしまう。

その糧^{かて}はあたえられ、

霊的な糧だね。

その水はともしきことなからん。

「ともしきことなし」と。この16節は素晴らしい境地です。そういう、おおらかな、そして本当に担いのまた包みの霊、包みの愛です。



●「ああ、そうかね」

白隠和尚というものはおもしろよ。貞享2年（1685年）の12月25日に生まれたんだよ、クリスマスに。至道無難禪師の弟子の正受老人の弟子だ。これは原宿という所での話だ。ある商家の娘がそこで仕えている男と関係して子どもができてしまった。それで困って、親に勘当されると思って――白隠さんは大変な坊さんだから――

「これは実は白隠さんの子です」

と偽った。そしたら、親父は、

「白隠さんならしょうがないか」

と、ある意味では思ったらしいね。それで、生まれるまで黙っていた。そして、生まれたら、子どもを白隠に持って行って、

「これはあんたとの間にできた子ですから、あんたにあげます。育ててくれ」

と言った。白隠は「ああ、そうかね」と言って受けとって、そして、方々の奥さん連中からもらい乳をして育てた。そのうちに、そのお嬢さんはさすがに気がとがめてしまって、

「実は、これは白隠さんではなくて

もうその家で仕えていた青年はどこかへ行ってしまったんでしょね、

去って行ったあれとの間にできたんです」

と。そして今度は、親父さんがびくりしてしまった。悪かったと。白隠さんはそれを何もとがめないで、「ああ、そうかね」と言って受けとって育ててくれた。今度は平身低頭して、それこそ平伏してしまった。そしたら、白隠さんは

「ああ、そうかね」

と。何でも「ああ、そうか」と。そういうのは、もう善悪を超越している人の言葉です。善悪を超越した境地で、全部受けとってしまう、自分が。そして、相手を本当にやわらく包んでしまう。はじめは、白隠はこういう悪いことをしたというので、

「あの生臭坊主め」

という悪い評判がたってしまったが、本当のことがわかったものだから、今度は逆に、

「さすがに白隠さんという方はそういう方だ」

と言ったという話があります。キリストは私たちの一切を、「ああ、そうかね」と言って受けとってくださいっている方です。そういうわけで、

「愛は一切に勝つ」

とは、そのことなんです。

●釈迦にしゃかなし

キリストは愛、お釈迦さんは慈悲、孔子は仁、みんな同じです。

「仁は人なり」



というね。イデオロギーではどうにもならん、理屈では。イデオロギーでは絶対に平和はこない。それぞれのイデオロギーには真理性がありますが、限界がはつきりある。私は、福音を「何々主義」という言い方は大嫌いなんだ。神秘主義だとか、無教会主義だとかね。イズムを超えなければダメ。概念で規定されるようなものでは絶対にありません。

この超絶の世界に入ると、いかなる主義もその真理性はちゃんと認めて、それをちゃんとオリエンテーレン、位置づけることができる。何でもかんでも否定するというのはない。それぞれをちゃんと位置づけることができる。非常に大きな世界です。それが本当の霊知の世界、霊的な知の世界です、そういう認識ができるのは。

昨日ちよつと引用した、

「釈迦にしゃかなし、法なし、教なし、ならいなし。」

というのは素晴らしい言葉ですね。「釈迦にしゃかなし」なんて、こんな言葉には私は初めてぶつかった。

「お釈迦さんは自分をお釈迦さんだと思っていないよ」

ということですよ。

「キリストは自分をキリストだとは思っていない。何ものともしていないよ」

ということ。そこに本当のキリストがあり、そこに本当のお釈迦さんがいた。法がない。

「これが法でいふこと」

なんて、いわゆる神学的な表現はできない。私の神学は、神学を嘲る神学なんですから、まちがわないでくださいよ。いわゆる神学を超えた神学なので、概念構成にはならない。だから、私のあの本(『無の神学』)には誰も書評が書けないんです。

「これは一体、神学か」

と思うんだよ、普通の神学者は。いわゆる論理的な展開をなにもしていないから。

「これを妙と名づけて妙法をとき、阿字と名づけて真言をとき、仏と名づけてあみだきようをとき、四十九年一字不説とのたもつ」

という。お釈迦さんは四十九年、結局一字も説かなかったと。こういう逆説的な言い方は、「ただあたまで聞いたつてどうにもならんよ。全存在で受けとつて、そこを生きてもらいたい」

ということなんです。もう西も東も同じことです、到達している境地は。凄いのがあるね、やっぱり、これ。

「身も消えて心も消えてわたる世はつるぎのうえもさわりざりけり」

世を渡るのに、身も消えて心も消えている。剣の上をさわらない、剣に切られない。剣渡りがね。身も消えて心も消えている。

身も消えて心も消えて、キリストは水の上を渡りました。ガリラヤ湖上を。

「変化^{へんげ}じゃないよ、私だよ」



と言ったら、

「ああ、あなたですか。それじゃ、そこへ行かせてください」

と、全身でペテロはその時に叫んだ。その時に二、三步あるけた、水の上を。ところが、すぐ分裂した。波と風とを恐れた。沈みかかった。SOSだ。

「なんぞ、恐るか」

と、キリストは今度は彼を捕まえて、舟に上げてやった。あれはゲエテが非常に好きな話なんです。信仰はそういう境地だと。ゲエテという人は、本当はわかつているんですよ。無教会は、「ゲエテはどうのこうの」なんて言っているのはとんでもない。

●身より仇はなしと知れ

「仏とはただかりそめの名なりけり。慈悲は仏の形なりけり。」

と。「慈悲は仏のかたち」というのは、仏のあらわれ。仏とは名ばかりで、慈悲のないところに何の仏かということです。「慈悲は仏の形なりけり」と、これは無難禪師の言葉です。

「仏道に入らんとする人はまず身より仇^{かたき}はなしと知るべし」

と。仏道に入ろうと思う者は、自分の身が最大の敵だと。

「身より仇はなしと知るべし」

と、身より他に仇は、敵はない。自分の身が仇だと。私が言っている「身読」の「身」はその意味じゃないですよ。けれども、自我という身は仇だと。この「身」は自我です。自我は、これは仇だ。「こいつは仇だと知っていないと仏道には入れないぞ」と。

「身より仇はなしと知れ」

という。これはキリストも同じことを言っている。

「己を憎まずば、わが弟子となることができない」

と言ったのがそのことです。

「自分を愛するは最も悪いことだ」

と、西郷南洲も言いました。

だんだんその気持ちから抜けてきたでしょ。ありがたいですよ。いわゆる自己主張がなくなる。意志の強い人は一番むずかしいんだよ、この世界は。けれども、パウロは意志の強い人間だったが、これがひっくり返された。キリストにひっくり返された。それからもう、「これはとんでもない大間違いをしていた」

と言って、今度は彼は本当にキリストの証者になった。

人間には、知的にすぐれた人、情的にすぐれた人、意志的にすぐれた人と、いろいろあるよ、人間の種類は。どれでもいいよ。要するに、どれであろうと、そいつが一辺ぶつつぶされて、そして、今度は生かされるんだ。キリストは与えたその性格を全部、変質させて今度は使いたもうんです。ただそれをいわゆる禁欲的に、なにかもぬけのからみたいにするのでは



ない。神さまの与えた素質だから、神さまが与えた素質は、自己中心になっているのを神中心にひっくり返すわけだ。そして動いていく。

人真似はいらんですよ、人まねは。手先のことが好きだったら、大いに手先のことをやってください。大学なんかに入らなくていいんだ。日本は何でもかんでも大学卒、それから有名校、なんのかんのと、もうとんでもない間違いだね。

「清き身をも心も棄てぬべし本来空を神というなり」

と。これはおもしろい言葉だな。空を神というなりと。

「神さまのことは、仕方がない、空とか無とか言うしか言い方がないよ」というような言い方です。

●終末の王国

今度は、17節から終りまでですけれども、これはちよつと奇想天外なことが書いてある。何ごとだかわからないようなことを。これは終末の王国です。

17 なんじの目はうるわしき^{さま}状なる王を見、とおくひろき国をみるべし。：

：20 われらの節会の邑シオンを見よ。なんじの目はやすらかなる^{すまい}居所となれるエルサレムを見ん。エルサレムはうつさるることなき幕屋にして、その^く杣

はとこしえにぬかれず、その縄は一すじだに断たれざるなり。

エルサレムの中心が神殿であるが、その神殿のまた中心が幕屋ですから。しかも、その神殿をここでは考えていない。幕屋のことだけを言っている。さすがは面白いですね。その綱が切れないと。

21 エホバ我らとともに彼処にいまして^{みいつ}稜威をあらわし給わん。斯てそのころはひろき川ひろき流れあるところとなりて、

あんな所に広き川がありやしないですよ。だから、これは全く霊的な幻を見ているわけだ。というのは、チグリス・ユーフラテスは広き川でしょ。あんなのに負けないような素晴らしいことになるぞというわけなんだな。

その中には^{こぐふね}漕舟もいらず^{おおふね}巨艦もすぐることなかるべし。

大きな河にはよくその当時の軍艦が通っていたから、それでそう言うんです。これは平和の世界だから。

22 エホバはわれらを^{さば}鞫きたもうもの、エホバはわれらに^{おきて}律法をたてたまひし者、エホバはわれらの王にましまして我儕をすくい給うべければなり。23 なんじの^{ふなづな}船纜はとけたり。その帆柱のもとを結びかたむることあたわず。帆をあぐることあたわず。

「なんじ」というのは敵のことですよ。

その時おおくの^{たから}財をわかち



これは今度は、味方です。

跛者^{あしなえ}までも掠物^{えもの}あらん。24 かしこに住めるものの中われ病めりという者なし。彼処^{とが}における民の咎^{とが}はゆるされん。

罪はゆるされ、病はなしと。イザヤとほとんど同時代に――同時代といったって、ずっとあとなんですけれども――やめた時はほとんど同じな預言者がミカという預言者です。そのミカという預言者は、イザヤの影響を多分受けたでしょうね。ミカ書にこういう言葉がある。5章の始めの方も素晴らしいところですね。

「2 ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小き者なり。然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我がために出べし。その出る事は古昔^{いにしえ}より永遠の日よりなり。3 是故に産婦の産みおとすまで彼等を付^{わた}しおきたまわん。然る後その遺れる兄弟イスラエルの子孫とともに帰るべし。

ここにも「帰るべし」とある。

4 彼はエホバの力に由りその神エホバの名の威光によりて立ちて、その群を牧^{やしな}い之をして安然^{やすらか}に居らしめん。今、

ここにも「今」と書いてあるね。

今、彼はたいなる者となりて地の極^{はて}にまでおよぼん。」(ミカ5:2～4)

それから、7章8節、

「8 我敵^{わがあだびと}人よ我につきて喜ぶなかれ。我仆るれば興^{おこ}きあがる。幽暗^{くらき}に居ればエ

ホバ我の光となりたもう。」(ミカ7:8)

という素晴らしい句があるでしょ。それから18節に、

「18 何^{いずれ}の神か汝^{しか}に如ん。

「何^{いずれ}の神か汝^{しか}に如ん」という言葉が「ミカ」という字なんです。「ミカエル」という天使がいるけれども、「誰か神の如くあらん」という。「ミカ」というのは、「誰かかくの如し」という。「誰か如きものならん」ということが「ミカ」という意味です。だから、「何^{いずれ}の神か汝^{しか}に如ん」というのが、まさに「ミカ」の名前はここから来ているわけです。

汝は罪を赦しその産業の遺餘^{のこりもの}者の愆^{とが}を見過^みごしたもうなり。神は憐憫^{あわれみ}を悦ぶが故にその震怒^{いかり}を永く保ちたまわず。19 ふたたび顧みて我らを憐み我らの愆^{とが}を踏みつけ、我らの諸^{もろもろ}の罪を海の底に投げしずめたまわん。20 汝古昔^{むかし}の日われらの先祖に誓いたりし其真実^{まこと}をやコブに賜い、憐憫をアブラハムに賜わん。」(ミカ7:18～20)

と。非常に祝福された、徹底的な贖いの、また愛の言葉が展開してありますが、ついでご参考^{さん}に読んでみてください。それで、今日のところは終りいたします。

